



@Ryoppi05670209

〈一年〉

海の髭と二対の猫	/	甲斐 竹善
猫とゾンビと女子高生	/	上荒磯 佑哉
技術少女は猫を愛でない	/	茶園 幸俊
私と不思議な猫の話	/	向 紗優
吾輩はアコトの猫である	/	吉尾 空

いつもいつも、飽きないのね。

猫は、名をアズという。

猫は、いつしか投げられた言葉について思案した。

無関心を孕んだ声音は、独り言じ

みた呟きのようだった。

慣れてしまえばどうということ

同じ退屈を貪る者同士、交わされる中^{なか}らいは多くないが、例の発言をしたのは中でも変わり種の同種であった。

もない粗い肌触りの防波堤に、アズは横たわって怠惰を謳歌する。それが、手持ち無沙汰の末に行き着いた、余生を過ごすに相応しい安寧だった。

煌めく水面は燦然と、縞が引いた

不味い魚も食えなくはない。欲を

橙色の毛並みを撫ぜる。細める双眸^{そうぼう}は安らかで、投げ出す尻尾は時折返る。

張って諍^{あらが}う愚物とは違うのだと、そう己を孤高に留めておくことで、アズは平穩を恣^{ほし}にしていた。何

者として邪魔することのない至高の楽園、とまでは誤想しないが、アズという一匹の猫は大して歳も食っていないにも拘らず、達観した面持ちで海を眺めているのが日常だった。

ところが、互いに不干渉の不文律を侵した声があった。

そうして、アズの思考に舞い戻る。羨望とも軽蔑とも含まない一言は、まごうことなき冷淡な無頓着の賜物^{たまもの}。

アズは己の嗜好^{しこう}を汚されたと憤っているわけではないが、どうも耳が忘れてくれない。

潮風が一つ吹き、^{まぶた}瞼を閉めたアズは、思い至る。

思い出した。噂のみに聞いていた、滅多に姿を見せないという猫ではなかったか。

聞くだに^{おのの}慄く冷徹の声、高雅を映した一点の黒。そんな噂話を小耳に挟んだ記憶が微かに^{うず}疼いた。

野良において高雅とは笑わせるなどと、^{ろく}碌に気に留めなかった与太話だが、思い返してみると、なるほど妙な話である。初めて目にするというのに、その神話じみた虚言を嘘と笑い飛ばせないほどに、確かに見た姿は的を射ていたのだから。

緑がかった鋭い瞳、汚れさえ^{ためら}躊躇いそうな蒼白の毛色と、そして背を蝕むように染まった漆黒。思わず耳をそばたててしまう、妖しげな声。そのいずれも、噂と現実、共に間違っているようには思えなかった。

アズは、その猫の名を知った。媛、ヒメ。

実に、相応しい名に思えた。

しかし、それきりだった。

アズが、ヒメに対してそれ以上の関心を示すことはなかった。

アズは知っていた。

世の中には、残酷があることを。こうして生涯を無駄遣いするの、それに準じた真理を悟ったから。儂さなど理解できない。己がいつしか尽きるのだと気がついたその日から、アズは諦観してしまった。何を得ても、何を^{たの}愉しんでも、その全ては何もない無へと行き着く。瀬に打ち上げられ、動かなくなつた魚を見た。硬い地に潰れ、脚がもげた虫を見た。冷たい雨に打たれ、衰弱して消えていく命を見た。

無駄なのだ。

アズが、これから過ごす日々にどれだけ価値を見出そうと、どうにもならないのだと。

あなたは、何を見ているの？

隣から、また声 flowed。

失言を後悔する余裕がなくなるほどに、その時アズは狼狽うろたえた。

伝えた。何もかも、意味がないと。

そうして、そこにいたヒメは再び

重ねる。

何を、見ているの？

二の句を告げないアズに、ヒメは遠くを見た。

ボクは、そんなあなたを見ていたわ。

少し。少しだけ、魔が差したのかも。

近くで会ってみたかった。今、わかった。

その眼は月に輝いて眩しく、怯え

た猫を苦しめた。

会ってよかったって。

アズは、嬉しくなんか、なりたくはなかった。

何故なら、それはあまりにも虚しいから。

きつといつか、悔悟かいごに駆られる。何を紡いでも、アズの目にしか見

えない世界は、いつか終わってしまったのだ。

無駄なのだ、わかっている。

ヒメは、アズには見えない久遠くおんが見えているのだと、先の問いかけで

確信した。

何を見ているのか。それは、アズの中で言い知れぬ迷いとなって燻くすぶっていた命題であり、ずっと背けていた幻。定められた後悔を辿るだけの運命なんて、アズには向き合う勇氣がない。

だったら……。

きっと、アズはこれからも迷い続ける。

答えのない夢想の中に、溺れ続ける。

だから、ヒメは言ったのだろう。

ボクがずっと、一緒に考えてあげるわ。

ボクが見ているのは、あなたがボクを見てくれる未来だから。

青い海、白い砂、天気は快晴、そして、俺後ろでは

「ウツウーグッー」

「アーアー」

いつも通り元気にゾンビが歩いてやがる。本当、代わり映えない日々だ。

俺は、ゾンビを背に目の前の綺麗な海を眺める。まあ、海もゾンビ魚がうようよいるから泳げないんだけど。

「ちよつと！ 猫助！ 少しは助けてよ！ マガジンがきれそうなんだけど」

猫助、それは俺の名前だ。そして

それを呼ぶのは俺の飼主兼腐れ縁のヨミ子だ。

俺は、チラリとヨミ子を見るとプイツとそっぽを向く。

「ちよつ！ ゴメン悪かったって！ アンタが楽しみに取ったかに缶食べたのは謝るからさー！」

はあー。俺は、ため息を吐くと今いる石垣から飛び降りると跳躍しヨミ子の懐に首を入れる。

「ちよつ！ くすぐったいって！ アハ！ アハハハハ」

俺は、そんなヨミ子の笑い声をよそに懐から一つの手榴弾しゅりゅうだんを取り出す。それを、口にくわえるとヨミ子

から飛び降り、猫の俊敏さを生かしゾンビの群れの間を縫うように走る。そして、ゾンビの群れを抜けると前足で手榴弾を押さえピンを抜く。そして、空中に蹴り上げる。

直後、手榴弾は爆発。その、爆風でゾンビが数体吹き飛んだ。だが、俺の狙いはそれじゃない。

直後、今までヨミ子の方に向かって歩いてきたゾンビの群れが進行方向を変えてゆらゆらと進む。ゾンビは、大きな音のする方に進んで移動する性質がある。これで、こいつらはヨミ子の銃声じゃなくて爆弾のなった方向に進んでいくだろう。

さて、ヨミ子は死んでないかなー。

俺は、そんな事を思いゾンビの群

れの間を縫うように移動する。ゾン

ビ達の群れの最奥では、制服を血で

染め、バッグバックを背負った少女

がマシンガンを抱えるようにして

その場にへたり込んでいた。

「し、死ぬかと思った〜」

「たく。俺がいないと何もできない

のな」

「うるさいなー。って、何その手？」

「ご褒美」

「はいはい」

そう言い、ヨミ子はバックバック

から一つのチューブを取り出すと、

袋を破る。その瞬間、俺の鼻腔を香

ばしい匂いがくすぐる。

「はい、どうぞ」

ヨミ子の言葉が聞えた瞬間。俺は、

前足でそのチューブの袋を掴むと

必死にペロペロと舐める。上手い！

やっぱり、ジュールが一番上手いな

ー！

「なんだよ。その目は？」

「いや、猫助も猫っぽくなったなー

と思って」

「うるせー」

そう言い、俺は猫パンチをヨミ子

に食らわせる。そう、俺は猫だ。そ

れも、レアな三毛猫のオス。といっ

ても、別に最初から猫だった訳じゃ
ない。

二年前。俺は、普通に高校一年生

だった。それで、隣のコイツとごく

ごく普通の生活をしていた。ただ、

ある日世界で人類がゾンビになる

という某サバイバルゲームのよう

な事が置き世界は崩壊。

勿論、俺の通っていた学校にもゾ

ンビが現われ腐れ縁のヨミ子と逃

げたがその道中コイツをかばって

命を落とした。

そして、その後俺の魂は近くに死

ぬ寸前だったこの猫の体に入る事

で何とか命を繋ぎコイツと再会。今

に至る。幸い、人間とは話せるため、今回みたいにコイツのピンチを助けたりしている。

「さて、どうする？ ヨミ子？ 次の目的地までまだ距離あるぞ？」

「うーん。今日も野宿かなー。はあー、いつになったら次のコロニーに着くんだろう？」

「それはお前がちんたらしてるからだろ。それより早くテント張れよ」

「はいはい」

コロニーというのは、簡単に言っ
てしまえば街だ。生き残った少人数
の人間達が集まり家畜や作物時に
は武器なんかを作っている。ヨミ子

の持っている銃や手榴弾もコロニーから飼ったり貰ったりしたものだ。

では何故、俺たちはそんなコロニーで生活をしていないかと言うと、

俺たちが〈サバイバー〉という仕事

しているからだ。〈サバイバー〉とい

うのはこのゾンビ世界で出来た職

業であり主にゾンビに占拠された

街を奪還したり、コロニーではどう

やっても作れない物資や足りない

物資、食料なんかを調達してそれを

他の物資と交換したりなどをする

仕事だ。

まあ、なんで〈サバイバー〉やっ

てるかと言うと、単にヨミ子が共同生活を出来ないというのが一つ。後、ゾンビから人間に戻す研究をするならコロニーにいるよりも直にゾンビに触れあった方がいいからという理由もある。

意外にも、ヨミ子は殆どのは駄目だがこと研究に関しては天才だったりする。まあ、ヨミ子の場合にはゾンビから人間に戻すという目的以上の事を企んでいるみたいだが。

と、俺がそんな回想で尺を稼いでいる間にヨミ子はテントを張り終わっているかというところ――

「あれ？　ここどうするんだっけ？」

勿論、終わっていない。なぜなら、研究以外ヨミ子はポンコツだからだ。俺は、ため息を吐きこれで何度目かも分らないテントの張り方の説明をするのだった。

その夜。俺は嫌な足音で目を覚ます。どうやら、ヤバい事が起きたようだ。

俺は、スヤスヤと寝息を立てるヨミ子の頬に猫パンチを加える。

「ん……何？」

「起きろ馬鹿。やつらだ」

「えっ！　でもなんで」

と、その時テントの外でボトボトと音がする。

「雨……」

「あー、多分な。あいつらは、視覚も触覚も殆ど無いが聴覚は異常にすぐれてるからな。多分、他では違うテントが水滴に弾かれる音に気づいたんだろう。おい、トランシーバー、後とラップよりの防犯ブザーをくりつけてくれ。俺が突破口を探る」

「エッ、でもそれじゃ」

「いちいち、心配するな。いつもの事だろうが。いいか！　俺が合図出すまでここにいろ」

俺は、体に連絡用のトランシーバーと防犯ブザーを縛るとテントか出ようとすると、と、そこでヨミ子が俺を呼び止める。

「ねえ、なんで私の事を助けるの？」

「決まってるだろう！　テメエーがいなくなったら誰が俺の世話するんだよー！」

俺はテントを抜ける。猫の目は夜目が利く。それで、辺りを見渡す。おっ、良いのがあった。俺は、近くにあった車に近づく窓が少しだけ開いていた。車の中には鍵とそしてゾンビが一匹ハンドル席に座っている。一匹だけならあいつでもどう

にかなるか。と、大分ゾンビが集まってるな。さて、防犯ブザーでどれだけゾンビを……そこで、俺の目に街に取り付けられているスピーカーが目にとまる。俺は急いでその場を離脱。近くの建物まで走る。窓を覗くと案の定街に備えつけられているスピーカーを動かす放送室と、十数体のゾンビがいる。人間なら中にも外にもゾンビがいて一人でこの状況を突破するのは無理だろう。ただし、今の俺は猫。猫に足音はない。故に、簡単にゾンビの又をくぐり放送室にたどり着いた。そして、放送室の電源を入れる適当にCD

を流す。すると、街中に音楽が流れ、ゾンビ達がスピーカーの方向に歩いて行く。俺はそれを確認すると、トランシーバーに語りかける。

「俺だ、今のうちにテントから出る。それで、近くにある車に向え。中には一体ゾンビがいるから気をつけろ」

『分った』

数秒後、テントからヨミ子が現われる。ヨミ子は、車に近づくと中にいたゾンビを外から射殺。車のエンジンがかかる。幸い車の運転は前いたコロニーで教わった為運転は出来る。

俺も、すぐに放送室のある建物から抜け出す。流石に、銃声とエンジン音に気づいたゾンビが数体いたが俺はすぐに防犯ブザーのピンを抜きそれをあさっての方に投げることでゾンビ達の気をそらす。後は、俺が車に乗るだけ。と、そこでスピーカーに流れていた音楽がピタリと止む。そして、今までスピーカーにたかっていたゾンビ達が一齐に車に向う。

「車を出せえー！ー！！！」

俺の声を聞きコクリとヨミ子が車を出す。と同時に、窓を開け俺に手を伸ばす。

「猫助ー!」

俺は、地面を強く蹴り伸ばしたヨミ子の手に乗る。ヨミ子は俺の腕を掴むと勢いよく引っ張り上げそのまま助手席に放り投げる。そして一気にスピードを上が街を後にした。これは、猫になった俺と幼なじみの日常の一ページである。

僕は梓先輩あずさのことが苦手だ。彼女は間違たぐいいなく、奇人変人の類たぐいなのだから。

「ねえ、ねえ。後輩くん、猫！猫がいるよ！」

彼女が指を指した先。そこには防波堤から海を眺める一匹の猫がいた。この辺りではちよっぴり有名なボス猫だ。

梓先輩がもしも普通の女子ならば、猫を遠巻きに観察したり、或いは撫でたりしようとするのだろう。しかし、生憎と彼女はそういった類には興味がない。

あるのはキラキラと輝く瞳と、そ

の内に宿った好奇心だ。

「後輩くん。聞くところによると、

猫は建物の三回程度の高さから落ちてても簡単に着地しちゃうらしいよ。——もしもだよ、あの猫ロボットなら、どんな姿勢制御プログラムを採用しているのか？ はたまた落下の負荷に耐えなければならぬ脚部にはどんなサスペンションを採用しているのか？ 非常に興味深いと思わないかい？」

梓先輩はこうやって、何か興味を惹かれるものを見つけるとすぐにロボットや機械の類に例えて話し出す。

ロボット工作同好会「会長」、それが彼女なのだから。

凄腕のプログラマーの母と人工技師の研究者の父、おまけに祖父はロボット工学の博士号を取得するという紛れもない天才の血筋の受け継いだ彼女もまた天才であり、生粋の技術マニアでもあった。

「どうなんでしょうね」

「むっ、後輩くん！ なんだかノリが悪いぞ」

ならば、こちらも梓先輩と同じ土俵に立って議論を交わせれば良いのだろうか？ 残念ながら、それは応えられない要望である。

「僕は先輩ほど、技術系の知識がありませんから。あと僕は猫ちゃんを見かけたら素直にナデナデしたい派の人間です」

キツパリと、応えてやった。

僕も名義上は、彼女と同じロボット工作同好会の一員だ。だが、先述した通り、僕は技術系の知識をサツパリ持ち合わせてもいなければ、ロボットや機械の類にも興味がない。

ロボット工作同好会に籍を置く理由だって、とりあえず何かしらのコミュニティに属していたいからという底のしれたものだ。(まあ、彼女の発明や機材がギッチギチに詰

まった、同好会室を見た瞬間にここは明らかにヤバいと後悔したが)

「ナデナデしたい派かあ……確かにアレは手触りが良さそうだからね。ノラにしては毛並みも綺麗だし、お日様のいい匂いがしそうだ」

「そうですね、猫を見つけた時はこうやって遠巻きに愛でるのが正しいんです」

「ふむ……しかし、あの毛並み人工繊維で再現できないかな？ お日様の匂いに関しては何かしらの香料で再現できるだろうし……そうだ！ もしも私が超精密な猫ちゃんペットロボットを作ったなら、君

は喜んでくれるかな？」

「結構ですから」

マッドサイエンティストに片足を突っ込んだような発言に、僕はもう一度キツパリと断りを入れた。

梓先輩は紛れもない天才であるが、倫理観や常識といった頭のネジがしまっていないのだろう。何かしらを作る時は、ネジの一本たりとも締め忘れない癖にだ。

まあ、それでも今回はまだマジな方だろう。以前、帰り道で仲睦まじいカップルを見かけた時なんて特に酷かった。「人はなぜ、恋に墮ちるのだろうか？」という禅問答ぜんもんどうみたい

なことを言い出したかと思えば、
「恋に堕ちる感覚は雷に打たれた
ようだと言うらしい」と、自分に蓄
電池を繋げようとしたのだ。

あの時は彼女の好奇心を別な方
向に逸らすのに、どれだけ神経をす
り減らしただろうか。

「はあ……全く君はとことん釣れ
ないね。そういう愛想のないところ
治すべきだと思うよ」

「なら先輩は一刻も早くモラルを
身につけるべきかと。いずれ何かを
やらかすんじゃないかと気が感じ
やありませんから」

「私のことは良いの。それに——」

梓先輩は少し改まると、口の端を
小さく釣り上げた。瞳を細めて、イ
タズラっ子のような表情を浮かべ
て見せる。

「君は自分ではドライに振る舞っ
ているつもりだろうけど、残念だっ
たね。君はこんな私の話にも付き合
ってくれるお人好しなんだ。そんな
君ならば、私が間違えた答えを選ん
だとしても止められるだろう？」

「うぐっ……」

彼女がじっと僕の顔を覗き込む。

キラキラと好奇心に満ちた、その
瞳で。これだから、僕は彼女が苦手
なのだ。

「わあ……!」

あまりに綺麗な光景に、思わず感嘆が漏れた。よく晴れた空と、太陽を反射してきらきらと光る海。どこまでも続く青い景色は、都会ではなかなか見られるものではなく、やっぱり私は自然が好きだと改めて思う。

旅行先に観光地ではなく、なんてことない場所を選んだのは正解だった。人の多さや喧騒に飲まれるより、こうやって静かな場所で過ごした方が日々の仕事のリフレッシュになる。

堤防の近くに行くと、そこには一

匹のトラ柄の猫が座っていて、寄ってみても逃げることがなかった。野良猫だと思うけれど、人慣れしているのだろうか。

「可愛いねえ、触ってもいいーい？」
「にゃあん」

触ってもよさそうな返事だと解釈し、そっと手を伸ばす。そして頭や首を撫でると、猫は気持ちよさそうに目を閉じた。可愛い。

「君も海を見てるの？」
「にゃあん」
「綺麗だもんねえ。海は好き？」
「にゃっ」

言葉全てに濁点が付いたような、

力のこもった返事が返ってきた。違うよ、ってことだろうか。猫は水が苦手だから、それもそうなのかもしれない。

「あ、見て、船だよ。フェリーとかかな」

「にゃっ」
「違う？ じゃあ貨物船とか？」
「にゃあん」

まるで本当に猫と会話しているような気持ちになってくる。いくら頭がいい猫だとしても、流石にここまで人間の言葉を理解するってこととはない……よね？ まあいいや、可愛いのだからなんだってよし。

堤防に寄りかかって、猫と一緒にぼーっと景色を眺める。

静かで、とてもいい場所。忙しな足音も、煩うるさいくらいの車や電車の音だつてしない。こうなれば田舎に引越したくなるけれど、やっぱり仕事のことを考えるとそういうわけにもいかないのが現状。やっと波に乗ってきたところなんだから、今辞めるのはきつと惜しい。

でも煮詰めるような毎日で、流石に疲れてしまった。だからこうして現実逃避に、田舎に旅行に来ているわけだけれど。

「あっ、時間ないんだった」

時間の針は予定したホテルのチェックインの時間に迫っていた。体を起こして、バッグからスマホを取り出す。そして地図アプリを開く。

「つて言ってもさ、ホテルの場所いまいち分かってないんだよね。君さ、シーサイドホテルっていう場所知らない？」

「にゃあん」

「えっ、知ってる？ ここからどっちに行けばいいのかなあ、右？」

「にゃっ」

「そっか、左かあ」

確かに地図も左を指しているけれど、地図案内アプリって時々目的

地に連れて行ってくれなくて、信用できない所がある。

「ふふ、信じるからね？ 合ってたら今度またなでなでしてあげよう」

「にゃっ」

「い、いらなの？」

ちよつと傷ついていた。嫌だったのかな。

「じゃあね、猫ちゃん」

手を振ってその場を離れた……ものの、少し行ったところで立ち止まる。そして振り返って写真を一枚撮った。私は旅行に行っても写真は殆ど取らず、記憶に残すタイプだ。でも何故かこれだけは忘れないよ

うに形に残しておきたかった。

なんてことない小さな出来事だけれど、これが旅の醍醐味とも言える。いい旅行になりそうだと一人写真を見て微笑んだ。

吾輩はアコトの猫である。名前はこれからもない。

アコトというのは吾輩の飼い主だ。どきつい黄色のカバンにカタカナで書かれておったのだから間違いないだろう。

——ここのはずなのだが。

鼻が示した行き先は、くぐもった騒音の漏れる廃れた建物^{すた}だった。

『ハテソコ』とな？ 妙な名前だが、人間は飲食店などに洒落た名前をつけたがるものだということはアコトから把握済みである。

彼らは匂いではなく、名前をつけ

ることで自身の所有物を主張するようだ。家の前にもひよーさつとやらを取り付けていたのもそのためだろう。吾輩は漢字をまだ読めないのだが……。

しかし吾輩がこんなヘンテコな名をつけられなくて良かった。心底アコトに感謝である。

『ハテソコ』には、我ら猫にとって大きな透明の扉がそびえ立っていた。時は夏に差しかかり、日差しが身を焦がす時期であった。

街中の同胞たちが涼を求めてここに集まり、猫としての威厳もなく、腹を出して寝そべておる。まった

く嘆^{なげ}かわしい。何匹かはガラスをひっかいて侵入を試みていたが、それでは脳が足らん。

——ふん、そこいらの野良猫にはこの扉を開けることは叶わんだらうよ。

幾匹かの猫は吾輩を見て、威嚇の声をあげた。吾輩の身体はガラスをすり抜け、建物の内に降り立った。その脚は途中で溶けたように消えている。そう、吾輩は亡霊なのだ。

三つ頭の犬公を退け、船頭^{せんどうづ}連れずに大河を渡り、ようやくここまで辿り着いたのだ。

吾輩は主のアコトを探しておる。

まずは見覚えのある住宅街に降り立ち、アコトの匂いを追っている最中。会えばすぐに吾輩と気づくという自信があった。

といつても、やつと別れてからどれだけ時間が経ったのか、猫の腹時計では皆目見当もつかぬ。やつが大
人になっておれば、吾輩のことなどすっかり忘れてしまっていおるかもしれない。

それでも会いに行きたいのには理由があった。

吾輩は猫ではあるが、アコトの兄でもある。一応言っておくが、もちろんアコトはれつきとした人間だ。

当時はまだ他の人間のように二足歩行を覚えてはいなかったが。

とにかく兄として、吾輩はアコトを見守らなければならぬ。死に別れは意図したのではなく、強制的に連れて行かれた形だったため、アコトを残していつてしまった吾輩は心残りしかなかった。しかしその後悔もこれで終わるのだ。

——もうすこしで、アコトと会える。吾輩は高ぶる感情にしつぽを震わせ、吾輩は歩み出した。

ひょうひょうと冷気が毛並みを逆立てる。外は太陽もキラキラする

季節になってきているが、何もここまで冷やさなくてもよいだろうに。

がやがやとした音が店内に流れている。それは話し声も混じっているが、ほとんどはピーピー、ビービーとした嫌な音で、耳が痛い。そういえばこんなたくさんの椅子と騒がしさがある場所に心当たりがあった。

確かそう、居酒屋というやつだ。アコトの両親は居酒屋を営んでいた。吾輩がそこを離れる頃には店は潰れかけていたような。

しかし、この居酒屋は妙だ。人は嫌というほどたくさん居て繁盛

しているのだが、肝心の食べ物が無い。たまに酒臭い息が床を通る吾輩の鼻まで届くのだが、それ以外はタバコの残り香のみだ。いっこうによだれの垂れるように匂いはしない。

ここは居酒屋ではないのだろうか。と、匂いが強まってきて顔をあげる。うむ、ここで間違いなからう。

——アコト、久しいな。

「にゃあ」と控えめに鳴いてみせる。実は吾輩、この鳴き声は好んでおらん。真の猫とはこんなかわいらしく鳴くものではなく、威厳ある低い声

でしゃべらなければならぬと、常日頃思っているのだが、いかんせん人氣があるので若輩じやくはいらの真似をしている次第。

しかしアコトは吾輩に気づかない。何度鳴いても無駄だった。人間は成長すると亡霊や妖の類が視えなくなるとは噂に聞いてはいたがここまでとは。

アコトなら気づいてもらえると思っておった。それすらも慢心であったのだから。と思えば、こやつ髭なぞ生やしておるぞ。そなたは女であつたらうに。

「ああ、くそっ」

何が気に食わなかったのか、勢いよく機械を叩かれ、吾輩はびっくりしてしまった。名前はへんてこだが、『ハテソコ』のものを粗末にするのは礼儀としてどうなのか。だがこの声、聴いたことがある。

これはアコトではない。アコトの父上だ。よくよく考えれば雰囲気や匂いが少し違った。

タバコを吸っておるな。あれだけ母上と喧嘩になっていたらうに。まだやめてないとみえる。

ここにアコトはおらん。アコトの匂いが父上についていたらしい。

——それではアコトはどこへ？

当然答えてはくれぬアコトの父上は、また悔しそうに目の前の機械に拳を振り下ろした。

とぼとぼと店から出るとまた暑い日差しが吾輩を迎えた。しかし吾輩、すでに死んでいるため暑さとは無縁の身。暑いと感じるのもまた奇妙な話だ。

とぼとぼ歩いていると『ハテソコ』の建物の角を曲がったあたりに黒い車が止められているのが見えた。これには見覚えがあった。

朝になるとアコトがどこかへ送迎されていく車だ。確かに匂いがす

る。父上、ここに車を停めてからあの店に行ったのだな。

ひよいと車の側面の窓をすり抜け、車内に降り立つ。

「にいあつ」

聞きなじみのある声。そこには、昔と変わらぬアコトがいた。どうやら吾輩が死んでからそれほど時間は経っていないらしい。

髪は後ろ髪にまとめられ、いつものよれよれの服を着ている。まだ歩けないのか、ゴミだらけの決して清潔ではない車内の座席にそのまま仰向けに横たわっていた。

いまだ服を買い替えてもらって

いないことに若干の憤りをアコトの父上を感じつつも、アコトがこちらに気づいてくれたことが実に喜ばしい。

——相も変わらずに息災そくさいか？

アコトはそれに対して反応はしないまま車内に横たわって、何やらごそごそとし始めた。問いかけても答えてくれないのは父上と同じだが、アコトがきらきらした目でこちらを見ているのは、なんだかくすぐったいようで誇らしい感じだ。

「あい」

差し出された小さな手に握られた袋、『ニャンペール』という文字に

思わず、舌なめずりをしていた。これは吾輩が生前、好んで食していた食べ物だ。なんとも香しい匂いで、舌に溶けるようにべろりと平らげてしまう……。

——いやいや、いかん。吾輩は食べられんのだ。黄泉喰いよみくを知らぬのか。「？」と頭上にでも浮かんでそうな顔をするアコト。

まだ幼子ゆえ、当然知らんだろうな。死んだものが行き着く先、黄泉の国の食べ物を口にすれば、生きた人間は生者の世に戻る事ができなくなる、というものだ。

これはまったくの事実であり、ま

たその逆も然しかりなのだ。

つまり死者の魂が生者の世の食べ物を口にすれば、魂がこの世に蘇る。

それ故、黄泉を抜けるときの警備が異様に多かった。三つ頭の犬公に二股に割れたしっぽの片方を食われ、密航を企んだ吾輩を船頭が川に放り投げ、溺れさせられかけた。

まあ、やつらにも同情せねばならん。あれがやつらの使命であり、吾輩は現世のアコトを守ることが使命なのだ。

そう安々と生き返られては、均衡が乱れてしまうからな。ただでさえ

人間が現世を戦争やらで荒らしているというのに、あの世で獣が好き勝手やられては、運営陣はさぞ大変であろう。

だが吾輩、生き返る気など更々ない。生命や肉体があるからアコトのそばにいてやれなかったのだ。ついで話が長く、熱くなってしまったが、——それにしても暑いな、ここは。

ようやくここで吾輩は車内の異変に気が付いた。到底生き物が何十分と生活できるような温度ではない。これならまだあの野良猫たちの場所のほうがまだ涼しい。

急いでアコトに近づく。焼けるよ

うな熱で額に汗がにじんでいた。よく見れば顔も真っ赤である。ゴミが

山のように積まれた車内では外の光は届かずに気づけなかった。どうやら車体自体が日光を浴びて、社内を蒸し器のように熱くしているようだ。

と、車の外から何やら声が聞こえてきた。若い男の声だ。

「先輩。本当にやるんですか」

「本当もなにも、これが俺たちの仕事だろ」

——誰だ。

吾輩がドア外をのぞくと、黒いフードを被った二人組の男たちが車

の前で話し合っていた。警戒して毛を逆立てる。

「僕たちがドアを開けて、そのまま仕事をしなければ、この子は助かるんじゃない……」

気弱そうな細い声の男が大きいフードの方に何かを提案している。

「俺たちの仕事はなんだ？ 死神

だ。だが俺たちに生き死にを左右する権限はどこにもない。肉体から魂を早めに切り離し、その魂が迷わないようにあの世まで案内する。これが俺らのやるべきこと。特に、こんな子供には俺たちの『導き』が必要だ」

ドアを開けられ、大きな手が伸びてくる。やつは大きな鎌を持っている。

「どうしてもだ。どちらにせよこの子供は死んでいただろうよ。その魂を安全にあの世まで連れて行ってやるんだぞ。むしろ感謝してほしいくらいだね。さあ」

鎌を振り上げられる。吾輩は生意気なほうのフードの男に飛びかかった。

「あ、ちよつ、おいやめろ！」

——吾輩のアコトに手を出そうとは、しかも吾輩の目の前で。許さざる行為ぞ。

あらん限りの力で噛みつき、ひっかき、うなつた。男は必死にこちらを振りほどこうと腕をぶんぶんと振った。

「なんだこいつ。猫？ どうして霊体の猫なんか俺たちに攻撃してくるんだよっ」

吾輩には兄として、家族である妹アコトの成長を見届ける義務がある。こんなよくわからん輩にアコトを連れて行かれては、面目が立たぬというもの。こちらも必死に腕にしがみつき、牙と爪とを突き立てた。おうおう、悲鳴がまだ足りぬぞ。

にわかには狩りの本能が目覚めか

けたそのとき、ザクと身体のうちから鈍い裂音がした。

「うわあ……」

弱そうなフードが立ったまま腰を抜かしたような声をあげ、その細い腕から鎌が滑り落ちる。吾輩がみついたほうではない。

とたん身体に力が入らなくなり、そのまま腕に捕まることもできずに吾輩はアコトの近くに投げ出された。生意気なほうのフードが息を切らして、落とされた鎌を重たそうに持ち上げる。

「行くぞ」

「で、でも、まだ子供の魂が」

目を向けると今度は本当に腰を抜かして男が口をあわあわと動かし、す。

「馬鹿、さっさとずらからないと獣担当の死神に縛り上げられるぞ」

左前足のつけねあたりから、しつぽの近くまでの感覚がない。どうやら思ったよりも大きく切りつけられたようだった。まさかあんな弱そうなやつに。

「それに、現世には迷える魂なんか五万といる。大丈夫だ。誰にもばれやしないって」

男たちが足早に去っていく。

あんな輩やからに負けてしまうとは。

猫として、この上ない恥である。

こんな『ハテソコ』なる騒々しい建物の近くで魂がついてしまっても納得がいかぬ。アコトとは一緒にいてやれぬし……。

しかし幸いにも、車のドアは黒服の男たちが逃げてくれたおかげで開けられたままだ。車内の熱も次第に引いていくだろう。これでおそらくアコトは生き延びられる、はず。

「すまないな、アコトよ」

会ったばかりのときの元気はもうなく、あれが空元気のようなものだったのだと気づく。見るとアコトの口周りが汚れていた。舌で舐めて

綺麗にしてやると舌上がびりりと

反応した。美味い。魂に味覚があるのかと言われれば変な話なのだが。

「ニャンベール、か……」

こやつ、空腹に負けて吾輩用のエサを食べていたようだ。見ればあの頃とほとんど変わらぬ子供だというのに頬がこけていた。

急に身体が重たくなってきた。たださえ不安定な魂は、本当の死を受け入れたように次第にほどけていく。

「人間は好きではないが、アコトの成長くらいは吾輩が見守ってやりたかった」

そなたと共に成長し、少し早く吾輩が寿命を迎えた。ただそれだけのはずだった。

あのころの吾輩はいつものように考えることはできなかったし、そなたに話しかけようともしなかった。

でもいまは、あのころの記憶を思い出しては懐かしみ、アコトの無事を願っている。それでも一度そなたに会い、悪くない一生だったと、幸せだったと、言葉は伝わらなくともそなたに伝えたかった。

全身の毛が逆立つような感覚でもって、魂が終わりを告げる。

「大きくなれ」

名もない吾輩は、そこで目を閉じた。

『今朝、白浜港のパチンコ店の駐車場で発見された四歳の女の子、むらた村田誠まことちゃん。危険な状態でしたが、命に別状はなかったようです。不思議なことに車のドアは開け放たれており、熱中症や脱水症状が悪化することはなかったようですが、誠ちゃんまことのそばには子猫が横たわっており――』